昭和三十一年十一月二十五日　印刷
昭和三十一年十一月三十日　發行

昭和文學全集4
獅子文六集

著作者　獅子文六
發行者　角川源義
印刷者　小田茂作
東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所　株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七
振替東京一九五二〇八
電話九段〇一二一—〇一一五

整版所　扶桑印刷株式會社
印刷所　東日本印刷株式會社
製本所　鈴木製本所

Printed in Japan

獅子文六集

昭和文學全集
角川書店版

目次

卷頭寫眞　七
筆蹟　一五七
目由學校　二六〇
てんやわんや　三四八
胡椒息子　三四八
隨筆　三五二
顏の研究　三五四
バナナ禪語　三五五
あやまり癖　三五七
巴里天國
てんやわんやの話
解說　河盛好藏　三六一
年譜　三六四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

獅子文六集

夕月や鐘の音
を吟じ田螺哉　一茶

卯年文六

自由學校

彼女がさう叫ぶには

ガシャガシャガシャといふ音。ミシンの音といふものを、男性は、あまり好まぬやうだ。第一に、うるさい。そして、樂器よりも鋭敏に、使ひ手の感情を傳へるから、困る。怒氣を含んだ細君の脚が、ペダルを踏む場合、どんな、みごとな演奏をするか。それから、女性の自覺が、決して、戰後に始まつたものではなくて、ミシンが日本の家庭に普及されたのと、時を同じうするといふ見方も、捨てたものではない。とにかく、針箱の側で、妻が靜かに手を動かしてゐた時代には、家庭も、今よりは靜かであつたことは、事實だつた。

「ねえ、出かけなくて、いゝの」

あの大雜音を、スリ抜ける聲だから、相當、カン高い。光る聲でまた、刺す聲である。細君の駒子——滿算へなら三十を越すか、越さぬか。白地に黑の棒ジマの、肩衣のやうに、袖の切れたホーム・ドレスを着て、ミシンを踏む足は、ハダシである。これは、陽氣がいゝためで、身だしなみの問題ではない。少しは、ダラシのない方が、良人は助かるのであるが、萬事、これほど整理の行屆いた女も少い。ムダを知らない女である。體つきも、ムダな肉と背丈を拒んで、程のいゝ小作りだが、頭デッカチでも、胴長でもなく、內卷きにした黑髮も、豐かではあるが、毛深い方ではない。顏にしたつて、無用に大きい道具は一つもなく、眼がクリクリと强いのを、やゝ反つた鼻の愛嬌が救ひ、男のやうな口許と、ビスケット色に燒けたはだが、典型的美人となつて、同性に恨まれない用心をしてゐる。すべてが活用されてる顏で、もしムダを探すとしたら、兩眼の下に、少しばかり散在する、ソバカスぐらゐなものだらうか。

頭の働きも、ムダがない。

「十一時を、七分過ぎたわよ」

側目もふらず、ミシンを踏みながら、背後の本箱の置時計が、指さしてゐる時間を、正確にいひ當てる。その本箱には、十九世紀の英文學から、戰後紹介されたアメリカ作家まで、原書や譯本が詰まつてる。皆、彼女の藏書であつて、良人のあづかり知るところでない。しかし、彼女は良人が家にゐる時、讀書にふけるやうな女ではなく、ミシンでもかけて、內職の子供服を仕立てると同時に、その騷音で、良人を勤めに追ひ出す同時作業を、毎日の習慣とすることを、知つてる。

二間しかない離れ座敷、むしろ納屋といつた方が適當な、粗末な住ひである。日と雨に反り返つた濡れ緣に、良人の南村五百助が、大きな體を長々と寢轉んで、日向ボッコをしてる。五月の末で、日向ボッコの陽氣ではなく、滿身に汗をかいてる。すり切れた綿ネルのパジャマも、暑苦しいが、さういふことを、一向、苦に病む氣色が見えない。恐らく、眞冬に始めた習慣を、打切りにする意志も、神經も、持合せない男なのだらう。細君が、何度聲をかけても、返事をしないのも、同樣の原因かも知れない。

ミシンの音がピタリと止んだ。

「あなた、眠てるの」

「いや……」

空井戸の底から響くやうな聲だつた。

「眠てないんなら、返事なさいよ」

「してるよ」

「十一時過ぎたつて、いつてるぢやないの」

「あゝ、知つてる」

「知つてるなら、サッサと仕度をして、出かけたら、いゝぢやないの」

「うん」

と、いつたものゝ、五百助は、微動もしなかつた。まつたく、無感動の狀態である。恐ろしく大きな圖體で、松の木のやうに太い首筋を見せながら、打伏せになつてるが、着古した綿ネルのパジャマは、灰色に色がついて、肩、背、シリと、偉大な起伏を描き、鳥取海岸の砂丘と、異らない。人體といふよりも、自然の一部を聯想させる。むしろ、自然

そのものが、横たはつてるとしか思へない。自然が感動しないやうに、彼も、感動はご免なのであらう。

「そら、また、悪い癖を始めたね」

ミシンが、再び動き、カン聲が、また磨ぎ出される。

「一體、あんたつて人、さうやつて、落つき拂つてるのを、優秀とでも、思つてるんぢやない？　それ、非常に、滑稽なのよ。バカみたいなことなのよ」

「さうかね」

五百助は、眠さうな、聲を出した。返事をしなければ、うるさいことになるから、聲だけ出したのだが、腹の中では、批評の如きことを、行つてる。

――ずゐぶん、下品な口をきくやうになつたな。戰前は、あんな女ではなかつた。やはり、境遇のせゐだらう。

「さうよ。バカみたいなことよ。さういふ愚劣ほど内容のないものはないのよ。風船爆彈のやうに、主體性のない、東洋的氣休めなのよ。それを、ご當人は……」

その邊から、五百助は、耳を傾けなくなつた。もつぱら、ミシンの音だけを聞きながら、暑苦しい日光浴を、たのしむことにした。

この夫婦が、一緒になつたのは、昭和十六年の十一月で、戰爭の起る二十日ほど前だつた。相當、世の中は窮屈になつてゐたが、それでも帝國ホテルで披露をした時には、シャンパンも拔いたし、結婚式菓子も出た。いや、五百助の生れた南村家が、まだ、そんな無理を押せるだけの社會的勢力を持つてゐたのである。滿洲交通の副總裁だつた彼の父は、その頃もう死んでゐたが、その會社の持株と、賢夫人の母と、亡父の子分たちが支へてくれる家運は、まだ、少しも傾いてゐなかつた。畫ネオンとか、動かない置時計とか、蔭口をきかれる五百助ではあつたが、誰も、南村家の將來に、不安を抱く者はなかつた。

それが、この有爲轉變である。中央線の武藏間驛から、二十五分も歩かねばならぬ、こんなヘンピな所に、農家の離れ座敷を借りて、二人きりのわび住ひを始めたのも、勿論、戰爭のためだが、委細は後にして――

「ちよいと、ちよいと……もう、いゝ加減にしたら、どう？」

駒子の聲が、五百助の耳の端で聞えた。ミシンを離れて、側へ寄つてきたとすると、少し厄介なことになる。

矢庭に、手が伸びて、五百助のパジャマの襟にかゝつた。すると、猫がつまゝれたやうに、二十二貫の巨體の上半身が、スルスルと、もち上つたから、不思議である。心理が物理を支配する例は、家庭では稀でない。

「さ、お出かけなさい」

あくまで、冷靜な聲であつた。

五百助は、眼をまたゝきながら、アグラをかいた。明るい外光を受けて、顏が眞正面を向いたが、これは、珍らしい人相だつた。

もう、めつたに、こんな顏には、お目にかかれないのである。日蓮上人とか、西郷隆盛とか、精神力にあふれた英雄でなくては、こんな、黑毛蟲のやうな眉や、コッペ・パンのやうな鼻や、懷中電燈が二つ輝いてるやうな眼や、ハンバーク・ステーキのやうな唇や、それらを一切合財を包含して、なほ、球場の外野ほどの餘白を感じさせる顏の大きさを、持つてはゐないのである。しかも、そんな大きな頭部が、福助人形的な不安定を感じさせないのみか、むしろ、鐵瓶の蓋のツマミのやうに、小さく見えるのは、どういふものか。もつとも、五尺八寸の體と、二十二貫の肉との比例も、考へねばならぬが、それのみの理由ではないらしい。

とにかく、大人物の人相である。日蓮上人の木像、西郷隆盛の銅像を見ても、頭部は、皆、小さく見える。頭部は、問題でない。そこで、誰も、南村五百助の肉體に、威壓されてしまふのだが、細君の駒子とか、亡くなつた母親の秋乃とかの近親者は、彼の巨大な目鼻立ちの奥にあるものを、悲しげに、認知してゐた。なにも、巨大なるものがないのである。といつても、シミッタレたものも、ないのである。結局、なにもないといつた方が、早いのである。

彼は、學習院から京大を出て、長いこと遊

んでゐたが、結婚の年に、亡父の子分の世話で、東京通信社へ就職した。最初は、通信社でも、この大人物的肉體をどう扱つていゝか、困つたらしい。まづ、運動部に配されたのもその頃、最もヒマな部であつたことの外に、肉體は肉體を知るとでも、早合點されたのだらう。

ところが、五百助は、幼い頃から運動嫌ひで、どんなスポーツにも手を出したことがなく、まつたく、知識と神經を持合せないのである。彼の年頃で、野球のルールも知らないといふことは、珍らしい話である。劍道やラグビーは、最も好かないスポーツだが、それは、人と爭つて、勝たねばならぬ點が、露骨だからだつた。

彼は、人と爭ふことが、何より嫌ひだつた。これだけの巨體だから、腕力は相當あるにちがひないが、生れてから一度も、それを振るつたことがない。喧嘩といふものも、曾て、經驗がない。巨體に恐れて、人が喧嘩しかけぬからでもあらうが、彼自身が、そのやうな危險に、立ち寄らぬからである。

彼は、運動記者は不適任と知つてゐたが、それを、口に出せる男ではなかつた。そして、皮切りに、第七回日本體操大會に、先輩記者に連れられて行つたが、つまらぬ失敗を演じた。

五〇〇〇の長距離競走を見てゐるうちに、彼はすつかり退屈して、外苑スタディアムの便所へ行き、長いことシャがんでゐた。あるひは、多少、眠つてゐたのかも、知れない。もう、レースも濟んだ頃と思つて、外へ出ようとしたが、どういふものか、ドアが開かなくなつた。彼の力で、體當りでもすれば、ドアぐらゐは譯なく開くのだが、それを敢てする男ではなかつた。彼は、隣の便所に人が入るのを、根氣よく待つた。やがて、その機會が訪れると、壁越しに話しかけた。

「濟まんですが、丸の内の東京通信社へ、電話をかけてくれませんか。社の者が、こゝへ閉ぢこめられて、出ることができない、とね……」

愚かな頼みであるが、それを、正直に取次いだのは、善良な中學生でもあつたらうか。東京通信社では、二人も記者が行つてるのに、そのやうな電話をしてくるのは、なにかの變事が起つたかと考へ、社旗を飜へした車を飛ばして、屈强な社員が驅けつけたのだが、實に開いた口がふさがらなかつた。

それ以來、五百助は、社内で有名な人物になつたと同時に、運動部から、最もヒマな通信研究室といふのに廻されて、いつまでも、そこを動かなかつた。彼の紹介者が、社の有力な幹部でなかつたら、とうに、クビになつてる筈だつた。

彼は、運動部に向かないばかりでなく、機敏を要するジャーナリストそのものに、まつたく資格を缺いてゐるのである。それならば、勤人、商人、軍人、辯護士、藝術家のどれかに、向いてるかといふと、どれもこれも、考へただけで、ムリな相談といふ氣がする。どうやら、彼に勤まる職業といつたら坊主かも知れない。それも夜僧や小坊主は、それぞれ仕事があるから、適當でない。一山の和尚でなければ、ダメである。働かずに、主として、茶でも飲んでる商賣がいゝのである。そんな、うまい職業が、あるものではない。つまり、彼は、《職業》に適さゞる男なのである。

五百助は、よい家庭に育ち、稀な賢母の翼の下に溫められ、そして、今は、無類に有能な妻の駒子に、一切を支配されて、生きてゐる。駒子は、ある女子大の英文科を出て、英語が達者であるから、近所の農村戰後青年女子に、英語を敎へ、または、進駐軍關係の飜譯の下仕事をするばかりでなく、編物でも、アクセサリの製作でも、洋裁でも、先刻まで、土砂降りの音を立てゝゐたミシン仕事でも、直ちに、工賃にかへ得る技能を、持つてる。その他、料理の工夫にしろ、家計のヤリクリにしろ、普通の奥さんでは、足許にも寄れない腕前の持主なのである。

彼女とても、生れながら、今のやうな女でもなかつた。上流といはれる社會の空氣も、吸つたことのある女だが、娘時代に、父が疑獄事件で失脚したのが第一幕の暗轉、お次ぎが、五百助と結婚後の南村家沒落で、パッと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

暗くなつて舞臺の變る經驗を、二度も味つた結果が、彼女をこんな女にしてしまつたのである。

憂きことのなほこの上につもれかし、限りある身の力ためさん――作者が幕末志士だとすると、まつたくカビの生えた歌だが、可能性の限界をきはめるといへば、自殺した有名な戰後青年の心境だつた。

南村駒子なぞも、逆境に立てば立つほど、有能な素質を發揮する。一種の意地であらう。また、生れもつた氣質と體質のせゐだらう。彼女の側へいくと、カッカと、血だか、魂だか知れぬものゝ、ほてりを感じる。年中、燃え續けてゐる、ストーブのやうな女である。氣が勝つてる、といふぐらゐの表現で、追ひつく女ではない。

そこを見込んだのが、五百助の賢母だつた、秋乃刀自である。

「あゝいふ男ですから、あなたの長男だと、おぼしめして……」

婚約時代に、彼女は、駒子にさういつた。意味深長の言で、將來、夫婦になつて、子が生れても、それとは別に亭主を大きな子供だと思つて、面倒を見てくれ、といふのである。いひかへれば、五百助といふ男に、男性もしくは良人として、愛情や尊敬の起るのを期待しても、ムダかも知れない。それよりも、人間の女の持つてゐる、二つの愛情のうちで、母性愛といはれる方を、もつぱら用ひてくれ――さういふ依頼であつたのだらうと、駒子は、今にして、時々、思ひ當るのである。姑は、實によくわが子を、知つてゐたのである。

だが、そのころは、彼女もまだ處女で、それを、生みの母の謙遜だと、考へてゐた。といふのも、駒子は、五百助にホレてゐたからである。この、とらへどころのない、大きな壁のやうな男に、彼女は、いひ知れぬ魅力を、感じてゐたのである。

「えゝ、まるで、タイプにはまらない人なの。世間にも、小説のなかでも、ちよつと、見當らない性格なんぢやないか知ら？　牛みたいなところもあるけど、決してそれだけぢやないの。强ひていへば、海ね。海の廣さと、深さを感じさせるわ。つまり、大きな未知數なのよ。だから、とても、冒險だわ、そんな人と一緒になるの……」

婚約期間に、級友に、さう語つた時の彼女は、その實、確信と得意で、ほほ笑んでゐたのだ。氣位の高い娘として、あの男もイヤ、この男も嫌ひと、惜しげもなく、秀才や美青年を、ケトバシてきた彼女が、五百助のやうな男に、コロリと參つてしまつたのは、不合理の極であつた。或ひは、過度の合理の災ひであつたかも知れぬが、結果は、女賢しうして、牛を賣りそこなつたのである。いや、買ひそこなつたのである。

母の秋乃が生きてゐるうちは、五百助も、まだ、どこかに、見どころがあつた。あの賢女は、息子にボロを出させないやうに、絶えず心を配つてゐたのであらう。戰爭中に、秋乃が死んでからといふものは、連日の幻滅相次ぎ、海どころではない、牛ですらない、ただのデクノボーの正體を、現はしてしまつたのである。戰爭末期に、五百助が土方代りの兵隊にとられるまで、あの苦しい生活のなかで、何一つ役に立たぬ亭主として、彼女の手まとひ、足まとひになり續けた。

駒子のやうな女は、男と同じやうに、負け惜しみが強いから、グチはこぼさない。

――仕方がないぢやないの、かうなつた以上。

そんな風に自己説得を試みて、英雄的心境を、味はうとする。わが責任において、結婚したのだから、人にシリを持ち込まうとは、考へない。良人が、無比のデクノボーと知れた今日でも、離婚なぞする氣持はない。とにかく一緒にゐることは、ゐてやらうといふ量見である。そこは、出來星の女權夫人と、話がちがふ。

しかし、わが事において、後悔せずといふのは、宮本武藏にしても、一つの覺悟にすぎない。人間は、ことに女は、自分の知らない心のクラヤミが、大きい。クラヤミの中で、何がうごめいてゐるか、それは、わからない。

――みごと、一パイ食はされたわ。

彼女は、さういはないつもりでも、心がさういつてるのである。責任外といへば、それまでだが、根深いところから出る聲は、普通のオシャベリのやうに、輕快なものではない。

女の一生を、ワヤにされたといふ恨み。この恨みは、すべての細君が、大なり小なりに持つてゐる。非常に惠まれた細君でも、心の一隅に、それを持つてるくらゐだから、駒子が、クラヤミの中で、なにを考へたところで、罪とはいへない。しかし、その怒りと、恨みの本質は、身の毛もヨダつものがある。それが、ほんとに、女の一念といはれるものかも、知れない。

その、根深いものが、永久に潛伏してるといゝが、薄紙の下の文字のやうに、時々、透けて見えるので、困る。駒子は、近頃、眠つてゐるうちに、しきりに、齒ぎしりをする。キリキリと、深夜の怪音を立てる。晝間は、フーゥと、長い吐息が出る。眼が、ギラギラと、いやに光る。頰の肉が、ピリピリと、動くことがある。

なんとなく、腹が立つので、つい、五百助に、暴い口調を用ひるやうになるが、對手が、まるで無反應なので、倍加運動を試みずにはゐられない。《ざんす言葉》を、美しく使ひこなした彼女だつたが、この頃は、チップを貰ひそこなつた女給のやうに、サモしいロをきくやうになつた。

みんな、彼女の責任外――意識の外の行動である。もちろん、意識してゐる不平不滿も、相當ある。重い荷を背負はされて、文句をいはぬ奴はない。五百助が、社から貰つてくる金は、基本給一萬二千圓と、手當を加へて二萬圓近くなるのだが、稅金や、社內交際費や、組合費の外に、前借りの傳票が多く、手取り一萬圓を切れるのが、常である。それでも、ソックリ、駒子の手に渡してくれゝば、まだ助かるが、南村家のワカサマだつた頃の習慣で、月給なぞは、銀座で一夜に捨てるものと、まだ考へるらしい。五百助ぐらゐ、金の有難味を、知らぬ男はない。自分が、有難くないので、駒子も同樣だと、思ふのだらうか。一文も、持つて歸らない月もあり、毒づいても、ドヤしても、さらに應答なしとすれば、細君たるもの、遠大の計を立てざるをえないではないか。

さうでなくても、戰災、疎開の大騷ぎ、それから、財產稅の納付、南村家完全沒落までの整理淸算――みんな、秋乃母堂死後に起つた不幸で、駒子が一身に引き受けたので、年の割りに、世の中を知り、度胸のすわつた女になつてしまつた。

そんな女が、遠大の計を立てたとなると、なかなか厄介である。保險へ入るとか、ヘソクリを溜めるとか、そんな生易しいことはやらない。良人を對手とせず――天だの、運命だのと、直接取引きをしようとする。孤獨を常とする志を、立てようとする。これが、コワイ。

彼女が、英語と手藝とミシンで、月收一萬圓以上稼ぐやうになつたのは、ほんの第一歩にすぎない。五百助の月給は、アテにしないが、しかし、取れるだけ取らなければと、ビシビシ、鬼家主のやうに、やかましくいふのも、小手調べ程度のことである。新憲法を研究し始めたあたりから、ソロソロ、本筋である。女の母性愛は、それが良人に注がれる場合、やはり一つの限界を持つてるなぞ、哲學し始めるに至つては、まつたく、昔日の彼女ではなかつた。

太平洋戰爭が始まつた年に、結婚したのが、そもそも、よくなかつた。戰爭に搖られ、タタられ、大いに感化された。人は、戰爭未亡人の外に、戰爭夫人といふものゝ存在を、知らねばならない。共に、戰爭の生んだヤモメである。前者は良人を失ひ、後者は良人を見失つたといふに過ぎない。戰爭夫人は、大きくいへば、日本男子に愛想をつかしてるのだが、とりあへず、わが良人を對手とせず、無視してるのである。自分の力で生き、自分の頭で考へ、自分の腕で食ひ、自分の意志で欲情する――萬事、自分づくめである。一切、良人の世話にならないことを、理想とする。

自分の自由！

彼女等は、戰爭のお蔭で、それを獲たので

ある。しかし、誰にも、感謝はしてゐない。戰爭中に、モンペをはき、行列をし、バケツを持つて驅け出し、リュックを背負つて汽車で揉まれ、しまひには、便所の汲取りまでやつたんだから、それくらゐのことは、アッタリマエでせうと、考へてる。まだまだ、これくらゐの自由では、彼女等は、滿足しさうもない。なぜといつて、彼女等は、現在、自分の力で、自分を食はしてる。この意識は、タイヘンなものだ。日本の妻が、自分で食ひ始めたのは、歴史的最大トピックである。

——半分は、あたしが、食はしてやつてるんだわ。

駒子の場合は、そこまで行つてる。彼女の腹の底のどこかに、さういふ自負や、恩着せ根性が、ないとはいはれない。プロレタリアの娘は、さういふことを考へないが、根がよい家に育つて、自分のたくましい生活能力を發見したのも、最近であるから、意識も鮮明なのである。

彼女が最も氣に入らないのは、近頃、ことに烈しくなつた、五百助の怠け癖である。いくら、通信社勤めでも、正午出勤といふのは、アンマリである。第一、それだけ、彼女の自由時間を、短縮することになる。默つてゐれば、午後になつても、尻を上げない。ただの怠け癖以上に、少しウサン臭い點が、ないでもないのだ。

「さ、靴下。はい、ワイシャッ……」

わざと、一いち、そんなことをいつて、品物を、五百助の身邊に、投げてよこす。亂暴な仕打ちだが、普通の亭主ではないから、それくらゐに扱はないと、感じてくれないのだらう。

慣れてるとみえて、亭主も、眉一つ、動かさない。無言で、從順に、靴下をはき、ワイシャツのボタンをかける。たゞし、その動作は、高速度映畫よりも、緩慢である。いや、今日は、特別に、ユックリ手間をかけてる工合である。

「そのワイシャツだつて、お店ぢや賣つてないんだから、そんなシミなんか、つけないでね」

最近、飲んだ時のシクジリだらう——胸のあたりに、黄色い食ひコボシがあるのを、駒子は、見のがさなかつた。

下シャツ、サルマタの類にしても、普通人用では、間に合はない。戰前はある百貨店で、特大といふのを、賣つてゐたが、今では、手に入らない。みんな、駒子が、布をさいかくし、自分で仕立てゝやるのである。それだけでも、手のかゝる亭主で、他の女と添つたなら、どんなミジメを見るだらうと、そんなアワレミとも自負ともつかぬものが、彼女と五百助の間を結ぶ絲かも知れない。

「はい、定期と紙入れ——三百圓だけ、入れといたわよ」

さすがに、これは、投げては寄こさない。手渡されたそれを、五百助は、機械的に、内ポケットへしまつたが、まだ、立ち上る樣子はない。

しかし、駒子は、これだけの刺戟を與へれば、五分間以内に、反應があることを知つてゐるので、安心して、ミシンへ歸つた。

再び、ガシャガシャガシャといふ音。

「あら、どうしたの？　まだ、出かけないの？」

駒子も、この剛々しさには、驚いた。子供服の背縫ひが、濟んでしまふ時間を、五百助は、平然とアグラのかきッぱなしだつたのだ。

「どうしたつていふの、あんたは！」

彼女は、良人の側へ、電柱のやうに、つッ立つた。

「どうも、出かけても、しやうがないのでね」

デクノボーが、始めて、口をきいた。彼の動作と同じやうに、緩慢だつた。

「しやうがないとは、なによ」

奇怪な言を吐く、無能亭主である。彼女の聲が、キンキン響いても、やむを得ない。

「いやね、毎日、ブラブラ、遊び歩いても、しやうがないと、思つてね」

ひどく、落ちつき拂つて、五百助は、奇怪の言を續けた。

「誰のことよ、それ？」

「無論、僕のことさ」
「あんたが、毎日、ブラブラ、遊び歩く？」
「うん、この頃はね」
「なにをいつてるの、一體？」
駒子は、煙に巻かれた氣持で、暫らくは、推理の能力を失つた。
「あんた、社へいつてゐなかつたのね」
やつと、駒子は、思ひ當つた。
「さう」
少しも悪びれない返事である。
「まあ、驚いた——社へいくフリをして、毎日、遊んで歩いてたのね」
「さういふわけぢやないが、自然、さうなつたんだよ」
雲をつかむやうな返事には、慣れてるから、驚かないが、怠け癖が、平氣で社を休むまで、進行してゐようとは、彼女も、意外だつた。
「ア、キ、レ、タ——よく、まア、そんな、子供みたいな……」
勉強のきらひな小學生が、用ひる手口を踏襲した良人を、嚴格な母親のやうに、ハッタと、睨むより外はない。
彼女は、常に、五百助を、支配してゐる。良人の行動は、隅々まで、目が屆いてるつもりでゐたのに、今日は、虚をつかれた感じで、それだけ、腹も立つのである。
「わかつたわ——あんた、クビになつたんでせう？　え、さうでせう」
良人の無能振りは、誰よりも、よく知つてる。良人を東京通信へ入れてくれたY氏も今は、追放で、社外の人になつてる。良人がクビになる時期として、決して、早いことはない。
だが、五百助は、じじやくとして、
「いや」
「クビになつたんぢやないの？　ほんと？　ぢやア、ただ、怠けて、社を休んでたのね」
それも、不屈きな罪科であるが、クビよりは、まだ我慢ができる。以後、精勤させればよろしい。時タマにしか、持つて歸らない月給でも、ないよりマシだし、良人が定職を持つてることは、妻として、とにかく、氣休めになる。
「いや、さういふわけでもないんだ。さつきもいつたがね」
と、五百助は、いよいよ、落ちつき拂つてゐる。
「ぢやァ、どうしたのよ。ハッキリ仰有いな、要點を」
なんといふジレッタイ良人であるか。
「やめたんだよ、自分で」
アッサリと、それだけ。
「自分で、やめた？　辭職したつていふの？」
「さう」
今度こそは、呆れて、ものがいへない。
「まァ……それを、一言も、あたしに話さないで？」
「話せば、君は、贊成しないだらうからね」
「きまつてるわよ。一體、いつのこと、それは？」
「一と月ほど前」
「そんなに、前から、あたしを欺いてたのね。なぜ……なぜ、やめたの。やめなければならない理由は？」
キッと、良人を見ずゑたまゝ、體が寄つてくるのを、五百助は、少しにげごしになりながら、
「自由が、欲しくなつたもんだからね」
「なんですつて？」
それ以上、シャラ臭い言草があるだらうか。
自由が欲しい——それは、誰の言草であるか。
大きな赤ン坊より、まだ始末の悪い良人を抱へ、妻の本職と内職と、八面六臂の働きをして、時間に縛られ、金錢に縛られ、母性愛の依頼に縛られ、少しは、名家南村家の名に縛られ、多くは、日本の殘存的封建性に縛られてる駒子自身が、誰よりも先きに、その言葉を、口にすべきではなかつたか。いや、その言葉を、彼女の心のクラヤミでも、アカルミでも、常に、さゝやき續けてゐたのではなかつたか。
それを、半分、妻に食はして貰つてるデクノボーが、いふのにことかいて、なんたる言草だ。彼女の先を越すとは、何事だ。

「自由が、欲しくなつたもんたからね」
あまりに、シャラ臭い言で、彼女は、わが耳を疑つたくらゐだつた。
「ハッハッハ。あなたは、どうして、さう喜劇的なの。愉快よ、まつたく」
「なぜ?」
「なぜは、ないでせう。あア、コッケイ」
腹をたゝく眞似をしても、眼はギラギラと、異樣に光つて、五百助の顏が、蜂の巣になりさうに、詰問の視線が飛んだ。笑ひと同時化された怒りは、青い怒りで、かなり兇惡なものである。五百助は、人が好いから、そんなことはわからない。
「僕はね、この頃、いろんな疑問が起きてきたんだよ。社會に對しても、ウチの社についてもね。それを、つきつめると、結局、個人の自由とか、あるひは、人間の自由……」
と、少し調子に乘つた。
「お默ンなさい!」
つひに、駒子は、爆發した。
「あたしが、近所のハナッタラシに英語教へたり、ミシンかけたり、編物編んだり、南村家の親類づき合ひしたり、墓地の附け屆けをしたり、身をスリ減らして、働いてる間に、あんたは、一と月も、ブラブラ遊んでたのね。自分勝手に、社をやめてしまひながら、平氣な顏で、あたしから、三日目に三百圓づつ、お小遣ひを、卷きあげてゐたのね。さうね、さうね、さうね!」
「金は、君がくれるから、貰つてゐたんだよ。僕は、退職手當があつたから、べつに欲しくはなかつたんだよ」
「退職手當? あんたは、それまで、ネコババして、あたしに……」
「いや、匿したんぢやない。つまり、社をやめたことを、君に話しにくかつたもんだから……」
いやな沈默が、起きた。駒子は體中をブルブル震はせ、血の出るほど、唇を咬んでる結果としての、沈默である。が、突然、
「出ていけ!」
すばらしい、大音聲だつた。駒子自身が、驚いたほどの聲と、言葉の意味だつた。ほんとに、無意識で、彼女はさう叫んだのである。しかし、氣がついた時に、取消しをする氣はなかつた。彼女は、それを訂正しただけだつた。
「あなた、とても、ご一緒に生活していけませんから、家をお出ンなつて……」
五百助は、ジロリと、細君の顏を見た。
「さうですか」
ひどく、重々しく、彼は答へた。そして、ユックリと立ち上つて、長押の釘から帽子をとると、
「では、サヨナラ。退職手當の殘りは、僕の机の引出しにあるぜ」

五笑會の連中

五百助が家を出て、もう、一週間を經た。三日目、五日目と、駒子は、日を算へてきたが、同じ水曜日が、また廻つてくると、少しは、氣になつてきた。
しかし、タカをくゝる氣持には、まだ、變りはなかつた。五百助のやうな、無能な、氣の弱い男が、そんなにいつまでも、彼女のもとを離れて、暮していけるものではないのである。大方、友人の家でも、泊り歩いてゐるのだらうが、さうさう、續くわけがない。イヤな顏をされたぐらゐでは、感じないかも知れないが、お歸り下さいと、ハッキリ宣告されゝば、素直に歸る男なのである。
第一、小遣錢が續かない。
彼が出ていつた後で、机の引出しを開けてみたら、一萬七千餘圓が、入つてゐた。酷遇で有名な東京通信でも、九年間勤めた五百助の退職金に、その額は、少な過ぎる。出社のフリをして、遊び歩いてる間に、飲んでしまつた殘額であらう。さうとも知らず、三日目に三百圓づつ支給してゐた間抜けさが、なんとも腹立たしい。
しかし、あの日は、紙入れの中に、いくらも持つてゐなかつた。駒子の入れてやつた三枚の紙幣が大部分だつた。すると、二、三日で、煙草錢にも、不自由することになる。彼の友人たちも、金のあるのは一人もないから、必ず、立往生といふことになる。弱點の多い五百助の最大の弱點は、そこである。

「いや、やはり、家へ歸つた方がいゝと、思つてね」

大きな手で、頭をかきながら、ノッソリ、庭先きへ現れる姿が、駒子の眼に、アリアリと映る。そしたら、小ッぴどく、トッチめて、將來、かゝる所業なきやう、骨身に應へさせてやらうと、待ちかまへてるが、一週間たつても、歸つてこないのが、少し、張合ひがない。

——をかしいわ。こんなに、イキの續くのが不思議だわ。

駒子は、アワビ取りの海女でも見てる氣になる。勿論、そのうちに、浮き上つてくるとは、確信してるが、たゞ、その祕密を解きたいのである。

——ことによつたら、大磯にでもいつて、お金借りてるんぢやないか知ら。

ふと、駒子は、さうも思つた。《大磯》といふのは、大磯に住んでる五百助の叔父——秋乃の弟のことである。時代おくれの法學者で、一種の變人である。T大名譽教授といふ肩書はあるが、まつたく世を捨てゝ、好き三昧な生活をしてる。しかし、金は持つてゐない。昔の著書が、今でも賣れるし、近頃は、カストリ雜誌などに、下らぬ雜文を書いて、舊門下生に意見されたりするが、そんな收入は、知れたものだらう。それに、人にネダられて、金を出すのが嫌ひで、自分の意志で財布を開ける時は、いやに氣前がいゝといふ、根性曲りだから、オイソレと、五百助に援助してるとも、考へられない。その上、肉親愛なぞにとらはれる人間ではなく、五百助とまつたく同樣に、駒子を遇してくれ、その點は、彼女も、十分に親しみを感じる。義理の叔父なのである。

しかし五百助のことだから、シャアシャアと、金を借りにいつて、斷わられたかも知れないし、ことによつたら、そのまゝ、圖々しく、居候をきめ込んでゐないとも、限らない。とにかく大磯へつけば、なにか、五百助の消息が、知れさうな氣がする。さうでないとしても、かりにも南村家の當主が、家を出て、一週間になるとすれば、親類の長老である大磯の叔父に、一應、御屆に及ぶのが、細君の義務といふものだらう。夫婦喧嘩の內容を說明するのは、好もしくないが、あの變人の叔父なら、外の人たちよりも、まだ、氣安いのである。

——まア、行くだけ、行つてみるわ。

駒子は、朝のうちに、家事をかたづけ、戶を閉めて、家を出た。家主のところへいつて、

「ちよいと、出かけますから、お願ひします」

といへば、いつでも外出できるのだから、その點は便利である。

新宿で、土產物を買つて、東京驛へいくと、十一時十分の熱海行に、間に合つた。週日なので、座席も空いてゐた。板張りだつた車窓も、いつかガラスになり、そこから、初夏の淡い靑空と新綠が、美しかつた。

駒子は、自分の氣持が、ひどく浮々してるのに、驚いた。まるで、幸福だつた娘時代に、京都へでも旅行するやうな、愉しい氣分なのである。ハミングで、唄でも、うたふか、少くとも、ハンド・バッグの中から、チョコレートでも、とり出したい氣分である。亭主が家出して、一週間になるといふのに、これはまた、どうした心理なのだらうか。

さういへば、出かけに、化粧をする時からして、いつもより、念が入つてゐたやうだ。鏡の中の自分が、ビックリするほど、若く見えた。それから、服も、最近仕立てた、靑灰色のダブルチェックを着て、紺革のハンド・バッグで、色調を合はせ、せいぜい、スッキリと、年增美を發揮する努力をしたのも、不思議といへば、不思議だつた。まさか、大磯の枯木のやうなオヂイチャンに、見せたい量見でもないとすると、彼女らしくもない、ムダな行動といはねばならない。

横濱驛に着いた時に、バイヤーだか、平服の士官だか知らないが、奧さんと腕を組んで、窓の外を通りながら、ジロリと、駒子の顏を注視した。どうも、思はぬところに、キレイな花が咲いてゐた——といふ表情としか、受取れなかつた。彼女は、すぐ眼を外らしたが、少し、顏が赤くなつた。最近、彼女

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com